

主を畏れることは知恵のはじめ

主任司祭 吉池 好高

旧約聖書の箴言にある有名な一節です。今月は敬老の日にちなんで、ユダヤの古老たちが語り伝えた、このことばに心を留めたいと思います。

聖書を通して信仰に導かれる者たちにとって、信仰とは、「主」である神への畏れをもって生きるということです。私たちが信じるから、私たちの信じる神が存在するというものではありません。それでは、私たちの手で神を造ることになってしまいます。「主」への畏れを忘れたそのような信仰のあり方を、聖書は偶像崇拜というのです。

「主」である神への畏れをもって生きるということは、聖書が語るイスラエルの民の歴史が示すように、人間である私たちには耐え難いことなのかもしれません。「主」である神への畏れをもって生きるとは、常に、私たちの「上」におられる神を意識して生きるということだからです。その「主」である神のみ旨に服して生きるということだからです。

「主」である神を畏れ、そのみ旨に服して生きるということは、私たちの自由を阻害する、ずいぶん窮屈な生き方だと思われるかもしれません。けれども、何でも出来るということが、必ずしも、私たちに幸せをもたらすわけではありません。何故なら、私たちは全てを知り尽くしているわけではないからです。当然予測できるはずの事柄さえ、知り尽くしてはいないからです。この事実に従うということが、神を畏れるということです。神のみが、この世界の全てを知っておられる、宇宙万物の創造主だからです。神が存在するかどうかを論じ合う時代は終わったように思えます。そのような思い上がった態度が、今の私たちのあらゆる悲惨さの根源であるように思えます。

「主を畏れることは知恵のはじめ」。知恵とは、人間としてふさわしく、幸せに生きることが出来るための恵みです。張り切って人生を謳歌している間は、このような知恵の恵みに気が付きません。だから、この箴言は古老の口にふさわしいのでしょう。